

はじめに

大学では専門課程の2年生で薬理学を勉強しました。私の大学は基礎医学が難しく、生理学、薬理学が特に勉強量が多く、薬理学には追試がありませんでしたので、口頭試問の1回のチャンスしかありませんでした。夏休み明けの9月1日に試験がありましたので、夏休みを試験勉強でつぶされてしまいました。

授業のノートをすべて暗記して、さらに薬理学の参考書を暗記しました。薬の名前はとも覚えづらかったので苦労しました。薬の商品名は製薬会社が売りやすいように短くわかりやすい名前が多いのですが、薬の化学物質の名前（化学名）は長く覚えづらくて困りました。

たとえば、腰痛の薬に「オパルモン」（商品名）という薬がありますが、化学物質の名前は「リマプロスタアルファデクス」と長く覚えにくくなります。しかし、薬理学の試験にパスするためには両方を覚えなくてははいけません。

現在は医療費抑制のため後発医薬品が主流となっていますので化学名を覚えなくてはいけません。ただ、後発医薬品は夾雑物（不純物）が多いという理由で使いたがらない医者もいます。後発医薬品は薬

の開発費がかかっていますので、値段が安く国としては医療費抑制のために医療機関に後発医薬品の使用を勧めています。

医者として治療を行うためには、薬の名前だけでなくその作用機序さようきじょ（メカニズム）や副作用もよく知っていないではいけません。そのために薬理学の試験では膨大な量の暗記が必要でした。この試験だけで同級生の4人が留年しました。

薬に関する記録は紀元前3000～1500年に発祥した世界四大文明のメソポタミア、エジプト、中国にみられます。日本では1万数千年前の縄文人の住居の跡から、薬に使ったと思われる植物が発見されています。世界で一番古い薬は、4000年前のメソポタミアで使われたと記録されています。メソポタミアは世界で一番古い文明が発祥したところであり、現在の中東のイラクに当たります。ただ、この当時の薬はほとんどが経験に頼っていました。科学的に病気の原因や治療法や薬の作用機序がわかるようになったのは18世紀以降です。

新しい薬の開発には、多額の費用と高度な知識や技術が必要とされ、薬を作ることができる国はごくわずかです。その中でも日本はアメリカ、スイスに次いで世界第3位の薬の開発国です。日本で一番大きい製薬会社は武田薬品工業で、2位が大塚ホールディングス、3位がアステラス製薬です。

この本は、医学書的になって難しくならないように医者と看護学生の対話形式にしました。医者の名前は立花先生、看護学生の名前は優子さんとしてあります。この名前を付けた理由は、立花はかつての私のペンネームで、優子は幼くして亡くなった私の姉の名前です。



ラン